最優秀賞（国土交通大臣賞）

＜作文（中学生）の部＞

『私達の安全のために』

福島県いわき市立桶売中学校　二年　松本　恭平

土砂災害が、身近なものだと痛感した。三月十一日に、マグニチュード九・〇、震度七の激しい揺れが私の住む福島県を襲った。東日本大震災である。いわき市だけで千箇所近く土砂崩れが起こったとニュースで聞いた。

私はいわき市の内陸部、川前町に住んでいる。双葉郡川内村や田村郡小野町と接している山あいの地区である。山間部なので津波の心配はないが、怖いのは土砂災害だ。私の家は周囲より高い所に建っている。また、すぐ後ろは土手で一メートルほどしか離れていない。

震災後は原発事故への不安で、しばらく母の実家に避難していた。

家に戻った日に何気なく土手を確認すると、幸い大きく崩れたところはなかったが、所々で石が落ちてきたり、崩れて地肌が見えているところがあった。

私は今まで、家の後の斜面は木が生えていて、地面を支えているから大丈夫だと思ってきた。だが、地震によって簡単に崩れてしまった。

それだけではない。崩れた家の裏を見て、大雨が降れば、土砂崩れの心配もあると感じた。

また、私の住む家は高台にあるとはいえ、家の前には、夏井川の支流、鹿又川が流れている。上流部が地震で崩れ、自然のダムを作っていたなら、土石流の心配もある。さらに、それによって橋が流されて、孤立する可能性もある。

ちょうどそのとき、白河市で法面が崩れ、人が亡くなったと聞いた。国道四号線が土砂崩れで寸断されたニュースも見た。

今回は、自分の住む地域の被害はそれほどではなかったが、もしかしたら自分も同じような状況になっていたかもしれない。

そして、私は自然と土砂災害を防ぐためどんな対策が取られているのか知りたくなった。

調べてみると、土砂災害には様々な種類があること、それぞれに対策の方法が違うことがわかった。

まず最初に、土石流である。これは、山で崩れた土や石が、水と一緒にとてつもない勢いで流れてくるものである。

これを防ぐために設置されているのが、砂防堰堤である。これは、土石流を受けとめる役割をしている。

部活動の練習試合に行く途中、夏井川沿いを通る。途中に、砂防堰堤が点在している。普段気付かないが、身近な所にある施設だと知った。

砂防堰堤は、万が一の時に土石流や土砂崩れを受け止めてくれる。私たちの住む夏井川水系は、急勾配の場所が多いため、そういった災害が起きやすい。長い時間をかけて整備してもらったおかげで、これまで大きな被害がなかったのだろうと感じた。

次に調べたのが、地滑りである。地滑りは、比較的緩い斜面が粘土層を境に塊となって動くものである。私はこれが、雪崩が起こる仕組みに似ていると思った。

これを防ぐために設置されているのが、杭工と集水井、排水トンネルである。杭工は杭を粘土層の下まで打ち込んで、土砂の塊が動かないように固定する役割を持っている。

集水井、排水トンネルは、地滑りの原因となる地下水を集めて、川に流し、地下水位を下げる施設であ

る。これらの施設が設置されている場所は、社会の授業で習った扇状地の地形に似ていると感じた。そこから、福島市や会津若松市などで、このような施設が作られているのだろうと考えた。

この施設は、主に地中に働きかけるものである。目に見えるものばかりではなく、起きる原因を分析したり研究している人たちも日夜努力していると感じた。

最後に、崖崩れについて調べた。これは、大雨などで急な斜面が一瞬のうちに崩れるものである。今回の大震災で、家の裏山が崩れたのが、これにあたるだろう。これを防ぐためによう壁工やのり枠工が設置されている。だが、設置されていても崩れることはあるだろう。実際、私たちの地域から市街地に向かう唯一の幹線道路の法面が地震で崩れ、四ヶ月間通行止めになり、迂回していた。しかし、その崩落現場を見るたびに思う。ここによう壁工がなければ、通行止めどころか、道が無くなっていただろう。けが人が出たかもしれない、と。

今回の地震が起き、実際に身の周りで土砂災害が起こるまで、前に述べた施設の存在を知らなかったし、大切さも意識して来なかった。また、それを気にしなかっただろう。

一番変わったことは、通る道、通った場所の安全のために働いている人たちを想像できるようになったことだ。万が一が起きないように準備された中で、私たちは生きている。